

対話が拓く未来

平和な社会の実現に向け
世界の次世代リーダーと考える

SPF 笹川平和財団
Think, Do, and Innovate - Tank

社会の平和と安定を図るために、各国の次世代リーダー同士の対話を進める笹川平和財団の動きを6回シリーズで追う。

最終回

日本と中東に信頼の架け橋を

中東との関係強化に向け、笹川平和財団（以下、SPF）だからこそ取り組める対話の構築や独自の民間交流の意義について、アジア・イスラム事業ユニットのワイエブ社飛杏研究員と、SPFの訪日プログラムに参加したトルコ若手外交官ヴェリ・カアン・ウンル氏が語る。

中立的な立場で中東に貢献

中東では近年さまざまな紛争が起っており、地域の安定性が著しく揺らいでいる。地理的な特性からも国際的なハブとして中東は非常に重要な地域であり、地域の安定は世界の平和と包摂的な社会の実現に直結する。日本がエネルギーの多くを中東に依存しているという事実は、安定した中東秩序形成に向けて、より直接的に貢献すべき根拠の一つとなっている。

これまでSPFは、トルコの若手外交官やイランで外交を学ぶ大学院生を対象に、日本で研修を実施してきた。これらの研修を通じて、日本の国会議員や研究者、民間諸機関、学生などとの対話の機会を設け、継続的かつ深い対話により、両国と日本との良好な信頼関係が一層深まっていく姿を見てきた。

さらにこれからは、中東の複数国を対象とした多国間枠組みによる対話の推進に取り組んでいきたいと考えている。日本がこれまで中東諸国と築いてきた信頼関係を基盤に、中東諸国間の対話を促進する仲介的な役割を果たすことができるのではないだろうか。

2025年11月、新規事業開発を念頭にヨルダンへ出張した際、中東各国の関係者から、「中立的な立場を有する日本が主体的に関与し、中東諸国間の対話を促進してほしい」との声が寄せ

られた。同地域は利害関係が複雑に入り組む状況にあるものの、日本が仲介者となり対話を重ねることで、そこで生まれた相互理解が各国に広がり、信頼の基盤となって地域の安定につながる事が期待される。

中東に対する隔たりを緩和させたい

私はイラク人の父親と日本人の母親を持ついわゆるハーフだ。幼い頃からイラクにルーツがあると伝えられ、ネガティブな印象を持たれることが多かった。イラク、そして中東には負のイメージが先行していることを肌で感じてきた。しかし実際に中東を訪れると、各国はいずれも豊かな歴史や文化を有し、多様な魅力にあふれていることがわかる。国によっては、最先端のAI（人工知能）技術開発など、スマートシティの推進において世界をリードする存在として注目されている。中東関連の事業を通じて、こうした複層的な観点から日本人が抱きがちな中東への心理的な隔たりを和らげ、未来志向の新たな関係を築いていきたい。その思いが、この仕事に携わる原点と



ワイエブ 社飛杏 研究員
アジア・イスラム事業ユニット 第1グループ 戦略対話・交流促進担当：駐日イラク共和国大使館秘書、日本国外務省外務事務官などを経て、2025年5月より現職。

なっている。

一方で最近、日本人の中東研究者が減少しているとの指摘もある。中東への関心の低下に対する危機感を背景に、来年度の中東事業では、日本人の若手中東研究者を対象とした支援プログラムを開始する予定だ。日本と中東諸国との関係の維持・強化において、日本人若手研究者の存在は不可欠である。これからも発展的な関係構築を目指し、研究者をはじめ、政策決定者や次世代を担う学生など、多様な観点から関係者間での対話を深め、信頼関係のさらなる深化を視野に入れた取り組みを進めていきたい。

日本人若手中東研究者支援プログラムの募集を開始

2026年度から、中東地域の人文・社会科学分野を専門とする日本人若手研究者を対象に、現地調査を支援するフェロシッププログラムを開始。日本と中東との関係の維持・発展に寄与する次世代研究者の育成を目指す。



募集要項はこちら

今回の対話 中東との対話・理解促進

中東地域の紛争は世界の平和と安定に大きな影響を与える重要な課題だが、日本の関与は限られており、日本国内における中東情勢に関する報道の視点も偏りがちだ。そのため、日本として接触が困難な中東諸機関との対話の場の設定や若手中東研究者の育成などにより、世界の平和と安定および日本と中東の将来の関係強化を図っている。



来日したトルコ若手外交官と東京外国語大学でトルコ語を専攻する学生たちとの対話

トルコ若手外交官が語る —外交官としての視野や分析力を養った訪日研修

「実際の日本を知っている」と言える

この訪日研修を通じて、日本の人々と直接対話し、日本の文化に触れる機会を得たことで、「日本について知っている」から、「実際の日本を知っている」と言えるようになった。これこそが私にとって最も重要なことだ。ある国の政治や経済については、記事やニュースを通じて把握することができる。しかし、日常の暮らしの中にある独特のリズムや、人々の真心のこもった温かさといった細やかなニュアンスは、現地で実際に接してみなければわからない。このような経験は、本プログラムの目標にも掲げられている「親近感」を築く上で不可欠であり、外交官として今後の任務に臨むにあたって、私が最も大きな収穫として持ち帰るものだ。



東京都復興記念館で震災の歴史に関する説明に聞き入るトルコ若手外交官たち

日本の外務省の方々との意見交換は、私たち若手外交官にとって、日本がトルコ・日本の二国間関係をどのように捉えているのかを学ぶ、極めて貴重な機会であった。同様に印象深かったのが、東京外国語大学でトルコ語を学ぶ学生たちとの対話であり、両国関係の未来を考える上で重要な視点を与えてくれた。

また、研究者の方々からも大きな学びを得た。東京大学の本田利器教授からは、日本の地震の歴史と国としてのレジリエンス（回復力）に関する講義を受けた。単なる災害対応にとどまらず、国民の間に安全意識を深く根付かせようとする日本の姿勢を学んだ。同じ地震国に生きる者として、これを自らの課題として受け止めた。東洋大学の三沢伸生教授による日本・トルコ関係史の講義は、現在の二国間関係が、相互尊重の積み重ねの上に成り立っていることを改めて確認させてくれた。今後の職務においては、こうした歴史的な認識を踏まえ、より深みのある関係構築に努めていきたい。

共通の価値観を生かし、協働の場を創る

日本とトルコは、すでに強固な友好関係の基盤があるにもかかわらず、両国間の接点が限られていることが、関係をさらに深める上での課



2025年5月に開催した訪日研修に参加したトルコ若手外交官たち。右端がヴェリ・カアン・ウンル氏

題となっている。しかし、お互いに対する純粋な探求心があれば、両国の間に長期的な架け橋を築くことは可能だ。そのためには共通の価値観を生かしつつ、具体的な協働の場を創出することが重要だと考える。とりわけ、さまざまな分野の専門家同士が定期的に交流することは、実践的かつ深い理解につながる。

将来に向け、若い世代同士の対話こそ最も重要な軸だ。お互いへの純粋な探求心を育てられるかどうかは、私たちが若者に対して、そうした必要な対話の機会をどれだけ積極的に提供できるかどうかにかかっている。



東京外国語大学のトルコ語専攻の学生たちと両国のこれからの関係について議論を深めた